

ホームページに世界の大学戦略を見る

APプログラムとコンカレント・プログラム

早期に優秀な学生を確保する 高大接続

山田礼子 同志社大学教授

APプログラムとは

近年、少子化が進展する状況において、大学や短期大学にとっていかに学生を確保するかは最も優先すべき課題となっている。多くの大学、特に私立大学においては関係する高校の系列化を積極的に推進しているだけでなく、提携校、連携校の増加にも積極的である。日本においての高校との連携は、オープンキャンパス、体験授業、高校出張授業などが代表的な例である。現在、高大接続テストの導入が議論されてはいるが制度として拡がっているとはいえない。一方、アメリカの大学においても高大連携や接続は活発であるが、その方法が日本の高大連携や接続とはかなり異なっている。

今回は、長い歴史をもち、アメリカ国内のみならず現在では国境を越えて普及しつつあるAP(Advanced Placement Program)とエクステンションプログラムで主に実施されている高校生を対象としたコンカレント・プログラム(Concurrent Program)を、アメリカ版高大接続という枠組みで検討してみよう。

APプログラムとは、高校に在籍しながら大学レベルの授業を受講し、その授業を修了すれば大学レベルでの単位取得を可能とするプログラムを指す。非営利団体であるカレッジボードが運営し、TOEFLなどを実施しているETS(Educational Testing Service)が実施している。APプログラムを通じて取得した単位は大学入学後に卒業に要する単位として換算することも可能である。

カレッジボードは1900年に設立された非営利団体であるが、高校生等に大学に関連したプログラムやサービスを提供している。カレッジボードが提供しているテストサービスのなかでも大学への入学標準試験であるSAT(Scholastic Aptitude Tests)が最も知名度が高い。カレッジボードは毎年大学入学を目指して本テストを受ける生徒への登録サービスをはじめ、大学の情報提供サービスやマッチングサービスなども提供しており、こうしたサービスを受けている高校生やその保護者は毎年300万人以上にも上る。

APプログラムは1952年に始まり、カレッジボードが提供するAPプログラムのサービスはアメリカ国内の高校および世界24カ国の高校で利用されている。

<http://www.collegeboard.com/student/testing/ap/about.html>

現在、APプログラムで提供されている科目と試験は22の学習分野からなる37科目と試験に及ぶ。カレッジボードは科目とその試験の提供というサービスだけでなく、AP科目を教えている教師への支援、APに関する成績に関するポリシーの制定に関して大学との調整機能も果たしている。つまり、高校に在籍しながら、大学レベルの授業を履修し、その単位認定の試験に合格することで大学レベルの単位を取得できる制度がAPプログラムであるといえる。

APプログラムの効果

モチベーションの高い高校生なら誰でもアクセスができるといふこの制度を通じて、高校に通学せずにホームスクー



リングを受けている若者もAP科目の受講と試験を受けることができる。

AP科目を履修する高校生にとってのメリットとして、第一に早期から大学レベルの授業を履修することで早いうちに大学での学習レベルに慣れることができる、第二に作文技能を改善し、問題解決技能を修得することができる、第三に高次な大学の授業内容に挑戦することで大学での学習習慣が高校に在籍しながら修得することができるといった点が指摘されている。ここでAPプログラムへの参加がもたらす効果を学生と大学という側面からより詳細に検討してみる。

大学への入学志願の段階において、生徒がアドミッション書類を提出し、審査を受ける過程において、もしその生徒がAPプログラムを受講していたならば、大学での学習への準備が整っていると前向きに評価されることにつながる。

次に、高校で学ぶ科目とは異なり、学識が深く、詳細な内容で構成されている科目を学習することができ、論理構成、分析など、大学での根幹となる学習の過程にかかわることで、良いスタートを早期に切ることができるという効果がある。すなわち、APプログラムの受講により、高校生でありながら大学レベルの科目を受講し試験に合格していることで、その生徒が学習上で優れているという証明になり、大学にとっては大学に適応する可能性の高い学生を入学予備軍として確保することにもなる。近年、連邦政府やアクレディテーション団体から従来以上にリテンション率や卒業率を上げることが厳しく求められている高等教育機関にとっては、費用対効果やリスク管理といった視点からも大学に適応

する可能性の高い学生確保は不可欠であるといえよう。

APプログラムを受講しようと計画している高校生は、各高校に在籍しているAPプログラムを教える教員やAPコーディネータと連絡を取りながら、実際のAPプログラム受講計画を進める。APテストの結果については、APグレードと呼ばれる試験成績が3以上であれば大学での学習を十分に進めることができるとみなされている。

従来のエリートから受講者も多様化

次に、大学におけるAPプログラムの具体例を検討してみる。スタンフォード大学ではAPに関する大学内の政策として、AP試験で高校生が取得した科目の単位を、領域ごとに10単位まで認定する方針のもとで、最大45単位まで認めている。ただし、スタンフォード大学はAP試験による単位を一般教育科目として認定する方針はとっていないが、一方で、外国語については、APグレードが4もしくは5以上あれば大学での外国語科目の単位を履修したものととして換算している。つまり、学則上AP単位を卒業単位のなかの選択科目に相当する単位として認定するか、あるいは専門教育単位として学科が認めた場合には認定するなど、かなり柔軟に取り扱っていることがスタンフォード大学の特徴である。

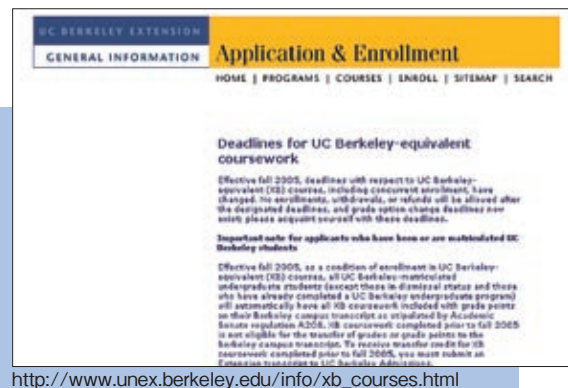
APプログラムは、本来優秀な生徒に早期から大学レベルの科目を履修させることで大学への適応を支援するいわばエリート教育の一類型であったが、最近では「APプログラムに参加を希望する生徒は誰でも挑戦できる」というような、大学進学を希望する生徒の誰もがアクセスできるようなプログラムに変容してきている。さらには、従来はAPコースは高校の最終学年4年生(あるいは12年生)を対象にしていたが、現在では1, 2, 3年生(9, 10, 11年生)も参加するなど対象学年が拡大化する傾向にあり、事実、高校低学年次生徒の履修率が全履修生徒の5割程度を占めている。

実際に、APプログラムを優秀学生のための大学での移行支援として位置づけるだけでなく、低所得の家庭の生徒あるいはマイノリティ生徒がAPプログラムに参加するように州全体で支援する政策を推進している州も出現している。

例えば、オレゴン州はAPプログラムに参加することが、特に所得が比較的低い家庭の高校生にとって、大学での

良いスタートとなり、実りの多い学習の機会になるとみなし、APプログラム参加支援を推進してきている。オレゴン州の教育省は、オレゴン州の大学進学に関する生徒の格差問題を縮小する重要な装置としてAPプログラム支援を位置づけているわけだ。割引昼食券が受給されている高校生はOregon Advanced Placement Test Fee Programに登録することで、無料でAP試験を受けることができる。また、在籍する生徒の40%以上に対して無料昼食券および割引昼食券が提供されている高校の生徒、管理職、教師およびカウンセラーを対象にした教育訓練の機会を提供する3年間のプロジェクトであるAPIP(Advanced Placement Incentive Program)というプログラムが州の支援を受けて実施されている。APIPは、ブッシュ政権によって提出された連邦法案であるNo Child Left Behind Performanceに定めるためのプロジェクトである。具体的には英語国語、数学、科学、社会等の中心となる科目についてAP予備プログラムを、オレゴン州の地方や貧困地域にある高校や中学を対象に提供することで、生徒の学力を向上させることを目的としている。AP予備科目やAP科目のカリキュラム構築および実際の授業のために、おおよそ1万ドルの助成金が25の地域を対象に配分されている。

オレゴン州の例は、ブッシュ政権によって通過したNo Child Left Behind Performance法案への対処政策であるものの、従来からのエリートのためのAPプログラムという概念を打破するような事例であるといえよう。しかし、APプログラムの展開と普及には落とし穴があることも事実である。つまり、高大接続といった点からみれば、どこまでが高校(中等)教育であり、どこからが大学教育であるのかが不透明になる危険性を伴っている。動機付けの高い生徒



はよりAPコースに挑戦するが、その年齢が年々低学年化することで、高校あるいは中等教育の意味が薄れてしまうかもしれない。スタンフォード大学のように単位認定に明らかに制限を課している大学もあれば、学生確保戦略としてAPプログラムを中核に位置付けている大学はより緩やかな単位認定政策を取っている。実際、高校、中等教育の空洞化といった新たな問題が浮上していることも否定できない。

コンカレント・プログラム制度の利用者

次に、エクステンションと呼ばれる拡大授業プログラムを通じて大学の授業を履修できるシステムであるコンカレント・プログラムを紹介してみたい。コンカレント・プログラムは、大学が提供している科目履修の前提条件を満たしていれば、誰もがエクステンションを通じて履修することができ、履修し終えた際に、単位を取得することができるシステムである。一般の社会人、他の大学の学生、正規留学が認定されていない外国人学生、そして高校生などあらゆる人々がこのコンカレント・プログラムを通じて大学の授業を履修することが可能である。ただし、コンカレント・プログラムは大学によって運用面が多様であり、高校生がコンカレント・プログラムを通じて大学の授業を履修した場合の取扱いも、大学進学の際の取扱いも多様である。

カリフォルニアにおいては、州立大学という性格からより公共性が高い高等教育機関であるという認識から、カリフォルニア大学システムに属する多くの大学がコンカレント・プログラムを導入している。例えば、秋学期と春学期の授業にコンカレント・プログラム登録ができるように設定しているカリフォルニア大学バークレー校では、コンカレント・プログラムを通して履修した授業は、バークレー校のエクステンションの成績書にBerkeley-equivalent (XB) courseworkとして掲載され、GPA評価もなされている。コンカレント・プログラムを通して登録する学生はmatriculated学生と呼称され、正規学生としての入学手続きをする必要はなく、正規学生が登録した後にスペースに余裕があればエクステンションを通じて履修ができるように取り決められている。コンカレント・プログラムを通じて大学の授業を履修している期間は、学生は正規学生と同様に大学の図書館や食堂、そ

他の施設を利用することができる。高校生もコンカレント・プログラムを通じて大学の授業を履修することも可能であるが、バークレー校ではそれほど高校生のコンカレント・プログラムを通じての履修を積極的に奨励しているというわけではない。カリフォルニア州の高校生にとっては、AP科目を高校に在籍しながら履修の方が一般的であり、コンカレント・プログラムを通じての大学の授業の履修は高大接続というよりは、一般の社会人や正規に留学が認められていない語学留学生や、これから正規留学を目指している外国人学生がこの制度を利用している。

高大接続に活用する例も

一方、コンカレント・プログラムを積極的な高大接続プログラムと位置づけて、高校生にコンカレント・プログラムに参加することを奨励している大学も少なくない。例えば、コロラド大学ボルダー校ではコンカレント・プログラムを通じての高校生の大学の授業の履修を積極的に受け止めており、そこで履修した単位は高校の卒業単位としても認定されるようになっている。

テキサス州サンタフェに位置するメインランド・カレッジもコンカレント・プログラムを積極的に高校生に参加することを奨励し、実際に運用している高等教育機関の一つである。メインランド・カレッジは学生数がおおよそ4100人を超える準学士プログラムに在籍している学生と4000人の科目履修生が通う比較的規模の大きなコミュニティ・カレッジであるが、高校3年生(11年生)および最終学年生徒に2重単位取得型(Dual Credit)コンカレント・プログラムへの参加を積極的に呼び掛けている。この2重単位取得型コンカレント・プログラムは、高校に在籍しながら早期に大学での学位取得を同時に目指すことができるように設計されており、高校3年次から本プログラムに参加した場合には、卒業までに最大限30単位の大学の単位の取得が可能である。2重単位取得科目によっては、高校でメインランド・カレッジの科目を受講するか、夕方高校の授業が終了してからメインランド・カレッジに通うかあるいは週末に通うかして科目を履修するかを、生徒の都合によって選択できる。

この2重単位取得科目は、高校生にとってメリットがあるのだろうか。高校生でありながら大学生として大学の図書

館などの施設を利用することが可能であること、あるいはキャリアサービスも利用できるなど将来設計を早期から考えることなどがメリットとして挙げられているが、最も大きなメリットの一つは、通常の大学の科目を履修するよりも、このプログラムを通じて大学の科目を履修する方がはるかに低価格で済み、奨学金など金銭補助の対象にもなっている点である。さらに、大学レベルの科目の単位取得を通じて、早期から大学での学習生活へのスムーズなスタートにつながり、実際に大学に進学した場合には、自信をもって大学生活を送ることができることも大きなメリットである。

APプログラムとの差異に関しては、AP科目を履修した場合には、AP科目試験に合格しなければ大学での単位を取得できないのに対し、2重単位取得型プログラムにおいては、科目を修了し単位を取得できれば、直ちに大学でも通用する単位としてその単位が認定されるということが大きな違いである。また、AP科目を教えている教師は大学の教員ではないが、2重単位取得型プログラムの科目を担当している教師は実際の大学の教員であるということも大きな差異であるといえるだろう。本プログラムに参加するための基礎資格としては、高校3年生(11年生)あるいは最終学年生徒であること、少なくともGPAの平均がBレベルであること、TAAS(Texas Assessment of Academic Skills)と呼ばれるテキサス州の標準試験の全領域に合格していること、メインランド・カレッジの規定を満たしていること、参加前にメインランド・カレッジが実施しているプレースメントテストを受験すること等であるが、挑戦しようとしている生徒にとってはそれほどハードルが高いというわけではなく、挑戦する意欲のある生徒は誰でも参加できるというプログラムである。

このように、近年アメリカでは従来から存在していた高大接続プログラムをより拡大あるいは普及させてきている。この根底には、早期から優秀な学生を入学させるための戦略であると同時に、コストをかけずにマイノリティなど高等教育の進学機会の少ない生徒にとっての新たなヘッドスタートプログラムを浸透させているといえる。しかし、一方でAPプログラムやコンカレント・プログラムに参加する高校生が増加することにより、中等教育の空洞化といった問題も浮上してきており、中等教育の真価が問われる事態にもなりつつある。